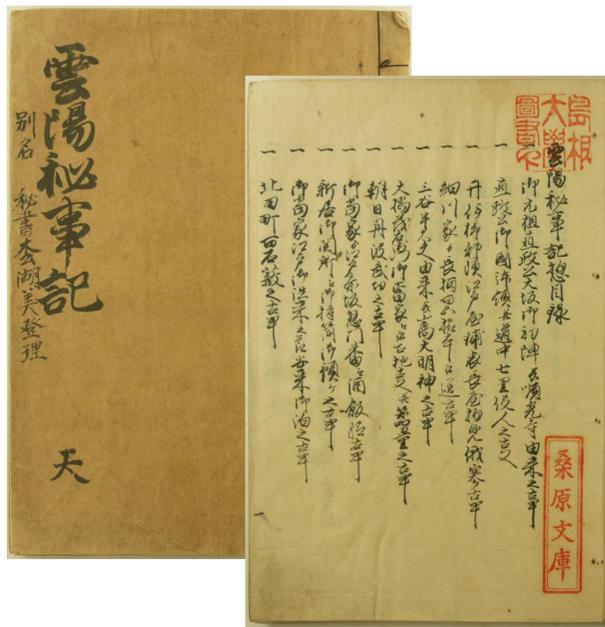


III 松江の文学と学問

①松江藩の文学

松江藩に関する実録体小説

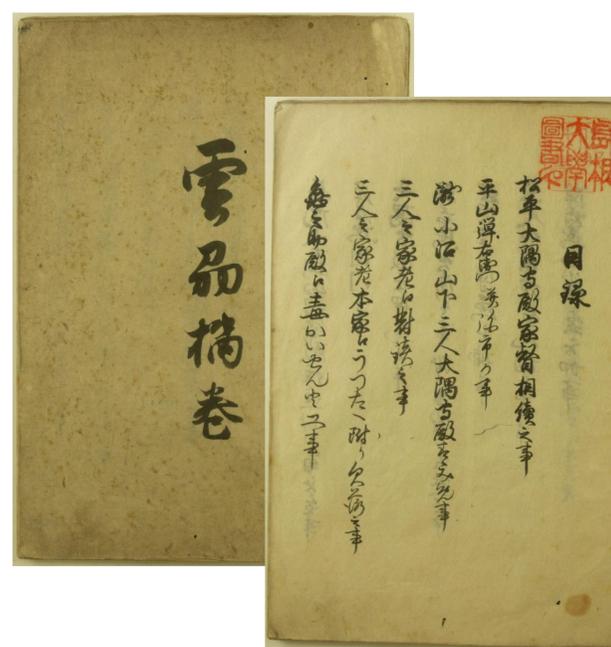
実録体小説とは、実在の事件を元にしたながらもフィクションを加えた、江戸時代独特の読み物で、広く庶民にも読まれた。



『雲陽秘事記』(島根大学附属図書館)
松江藩主松平氏、初代直政から六代宗衍まで約150年にわたる、藩主とその周辺の人々に関する逸話を集めたものである。



『三巴八雲の敵討』(島根大学附属図書館)
正保2年(1645)、飯尾彦之丞兼晴という人物が松江藩家老屋敷において伯父の敵を討った事件を扱うものである。

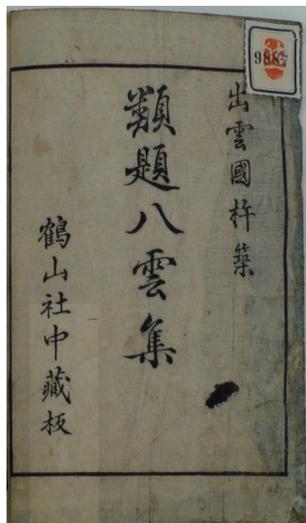
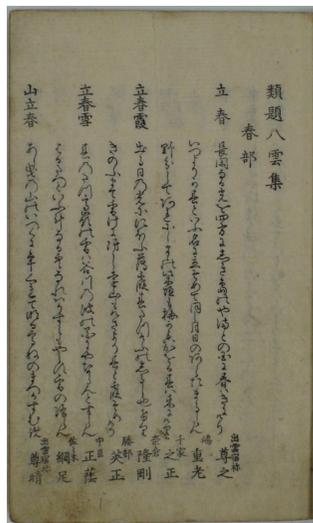


『雲州橋巻』(島根大学附属図書館)
松江藩の支藩である母里藩において、明和3年(1766)、藩主の後継問題をめぐって起こった御家騒動を描く。

👉 関連リーフレット: ③「『雲陽秘事記』にみる松江藩主の実像」、④「松江藩家老屋敷での仇討事件」

松江藩士も歌を詠んだ

平和な時代が続き、武士も歌を詠むようになった。島根大学附属図書館所蔵の『類題八雲集』や『出雲国名所歌集』にも、松江藩士が詠んだ多くの歌がみえる。



『類題八雲集』(島根大学附属図書館)



『出雲国名所歌集』(島根大学附属図書館)

松江藩士が詠んだ歌

【類題八雲集】

- 森 為泰 「かすみたつ遠の山辺の春風にちり行雲やさくらなるらん」
- 小泉真種 「恋草の茂れるまゝにいつとなく学の窓はくらくなりにき」
- 藤田輔尹 「立田川氷ながるゝ音す也神なび山ははる風やふく」
- 横地正徳 「今しばしまたば咲きなんみよし野の花みてかへれ春の雁がね」

【出雲国名所歌集】

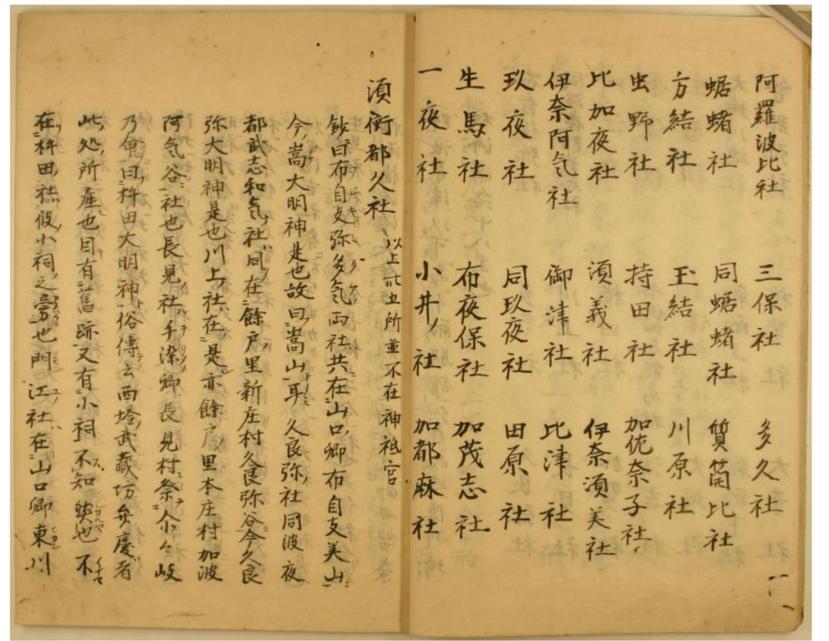
- 吉城退山 「老らくは万代経(ふ)べし亀田山さかゆく松の陰にかくれて」

👉 関連リーフレット: ⑤「『類題八雲集』にみる松江藩士の歌」、⑥「『出雲国名所歌集』にみる島根郡」

Ⅲ 松江の文学と学問

②松江藩の学問

『出雲国風土記』研究者・松江藩士・岸崎佐久次



岸崎佐久次著『出雲風土記抄』(島根大学附属図書館)

天和3(1683)年刊。天平5(733)年に完成した『出雲国風土記』の本文に初めて註釈をほどこした、風土記研究にとっては欠かせない本。岸崎が、郡奉行などの仕事で、出雲各地を踏査した際の研究成果である。

『出雲風土記抄』は、多くの写本によってひろまり、京・大坂・江戸などの国学者たちにも強い影響を与えた。島根大学附属図書館所蔵の桑原家本は、こうした写本のなかでも最善本といわれている。

この本をきっかけに、江戸時代の出雲国の人々も、身近な神社や地名が、古代へとさかのぼっていくのだということを意識するようになった。

きし ざき さく(きゆう)じ ときてる

岸崎 佐久次 時照 (1634~1690)

正保3(1646) 父の跡を継ぎ藩士になる。

ごうかたやく

万治元(1658) 郷方役に取り立てられる。

じかたやく

寛文6(1666) 地方役に昇進。

延宝7(1679) 神門郡奉行に昇進。

さしうみがわ

貞享3(1686) 差海川開削の指揮をとる。

貞享4(1687) 高瀬川開削の指揮をとる。

天和3(1683) 『出雲風土記抄』を著わす。



万寿寺にある岸崎佐久次の墓
(旧奥谷宿舎から歩いて5分)

Ⅲ 松江の文学と学問

③ 明治の文学



出雲は、江戸時代から全国屈指の漢詩創作が盛んな地域であった。その伝統は、1903(明治36)年～1946(昭和21)年、出雲を本拠にした剪淞吟社の機関紙『剪淞詩文』などにみることが出来る。

しかし、それ以前の明治初期～中期の漢詩壇の状況については、不明な点が多い。

島根大学附属図書館所蔵『松江竹枝』は、明治21年に刊行されたもので、当時の出雲漢詩について知ることができるとともに、松江の文学・風俗・社会をうかがい知ることができる貴重な文献である。

ちくし

篠田謙治著『松江竹枝』明治21年
(島根大学附属図書館)

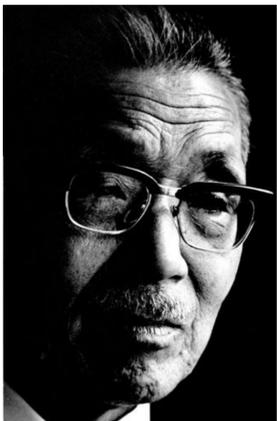
④ 旧制松江高等学校の学問



松江高等学校本館



和文独訳の授業風景



福本和夫
(1894～1983)

松江高等学校(現島根大学)は、1920(大正9)年、全国で17番目に設立された官立の旧制高等学校である。

松江高等学校には、文科と理科があり、第1外国語によって、甲類(英語)・乙類(ドイツ語)に分かれていた。

松江高校第1期生のうち、卒業できたものは82パーセントであり、勉学に対する学校の態度は、非常に厳しいものだった。

松江高等学校には、以下のような著名な教官たちがいた。

■ウィルヘルム・プラーゲ(ドイツ語教師)

語学の天才で、日本人より流暢な日本語を話していたという。日本語の古文も読めたらしい。日本に著作権概念を普及させた人物。

■フリッツ・カルシュ(ドイツ語教師)

シュタイナー哲学を日本に紹介した哲学者。日本の文化・伝統にも深い関心を示した。主著『ハルトマンの哲学』『哲学の諸学派研究』など。

■福本和夫(法律経済教授)

1920年代、「福本イズム」として一世を風靡した、マルクス主義から文化史まで、幅広い論文がある思想家。初期共産党のエースとして活躍していたが、1928年、共産党の一斉検挙で逮捕され、1944年まで獄中生活を送った。

■駒田信二(中国文学教授)

中国小説史が専門。主著『対の思想』ほか。松江高校在学中の篠田一士(はじめ)、高橋和巳等、のちの著名な文学者・作家に大きな文学的影響を与えた。